近代沽舎和歌　東九

類	號	函	架	冊
和書門	二〇六〇三	二九	二	二五

内閣文庫

類	號	冊	函	架
和書	二〇六〇三	二五	二〇一	八

内閣文庫

番號	和 20603	
冊數	25 (9)	
函號	201	97

寛文元五廿一ヨり同二九九迄

国立公文書館
National Archives of Japan

書籍館印

日本政府圖書

和學講談所

寛文元年五月廿日

紫裏 修理沙弥

稱竹可人

沙裏

我友と契りしもとしにし比竹にしきを垂れ茲に来

冥同前右兵光年

若竹乃ころよりも世々萬代こそねで猶ひしをり

検校初て 沙道宿

名ある竹ぞ高さやも見えて末のひとつ栽く付人ぞ五竹

一
正三位藤原光經
若竹のこゑしも世にはふしそへて世にもしらん
正三位藤原雅孝
さくらなるさきこそまさりや竹の庭のくもりてみよ
正二位藤原家業
すゝしさも竹の葉にのこる雪の世々の
正三位藤原弘資
秋ならでふくものかは竹のそよくこそなき
権中納言兼房
君か齢は萬代ふる竹の千世ふるきこの竹や幾らん

正三位藤原基定
吉野川こゝろあらはれてこの花もなにかは竹
参議藤原基賢
こゝろ生ひ竹のよやよ世々に竹を大宮人のたのしみ
参議平時房
こゝろあひ竹のはよはに君がよゝに竹の
参議從三位藤原資經
こゝろあひ竹の根に竹も世のすゑしらぬ
神祇伯雅喬
生ひ竹のすゑのは竹も君がよはいくよの竹よりかも知

左近衛権中将藤原宗宣

月の光みつゝねぬ夜とおもふらん いつかはいまも千世をかさねん

左近衛権中将藤原季継

西の海こゝろにたえぬ宝をもつゝむや君の千代の光に

右近衛権中将藤原為経

打よりて代々のためしやあふきみるひさしき君か千代の光に

左近衛権少将藤原為清

風そよく竹やなびく民の心をもそれにたとへし

左近衛権中将藤原実豊

君かすむ宿の千年の竹も猶いく千代までのかけそつもらん

こゝろ見る千世のためしやくもりなき 左近衛権中将藤原隆光
光そへて宿にかゝれる竹の葉は

和歌にこの千世の例を思ひつゝ 左近衛権中将藤原隆光
うちなひく世の民のこゝろや宝なる

君のすむ千代の竹のこのみかと
いはひそめてん千世のためしを

読師

中院大納言

講師　経孝

発声　持明院前大納言

出題

寛文元年六月廿四日

所當以絃楽亭之和歌

春

つかまつる　清家

うちもとよりくるしき風ふく春のあさ霞をそ見わたす

竹裏鶯　元信

鶯の声そまつ竹のうちはのはるのいろはかはらすに鳴

江辺草　知忠

春の川江のせのみなそこの草のしけるやつゆのたま光

遠村梅　稙仁

梅の花ちらん人もこそあれとふかくも見ぬほとをしるかな

柳舞風　宗量

春の日もかゝるかたにはなびくらん枝もみだれて青柳

暮春　氏光

おしむ春の日かずものこり少なくてたのむかたなきくれの空かな

夕立　雅房

晴わたる月の夜すがら花にまさるなかに夕だちの空

山夜梅　季信

たえまなく立のぼる雲に咲く梅はみかさねの山の雪に

卯花夜　通茂

わするなよ月にまがひて咲く卯花よもすがらゆきのおもかげのこる

新樹盛　為範

夏の色は見る目もしげき木の下にのこれるはなの見えぬかな

夏

聞郭公　俊広

郭公それとしもなき初音さへ待ちかねしよりはねのこる

採早苗　輝業

早苗とる手もとにさやけくうつる田の水の…

六月祓　稙仁

思ふ人ありし宿をは月影はいつまてとてかまたのなき哉

湖辺月　行業

河ちかくはれたるかたへなかれゆくひかりもそへる舟かるらん

池上菊　雅章

よその目にうつろふ菊の色をしもひとつにうつす池のかゝみか

杉間蝉　時量

たえ／＼に風もさびしき夕暮の音する杉にとまりてそ蝉のなく

暁夜月　知忠

夜ころにおくしもしろし秋風の月のひかりのいかにさえなん

秋

秋林雨　為清

錦とも風のさそひて散しほる紅葉のよそめも露の玉

隣家萩　雅章

中垣のあなたこなたにさくもさきさひつゝそよく萩の上風

野径薄　弘資

夜まもりて袖しもまねく旅人の入野の薄秋風ぞふく

嶺上鹿　通房

こゝろしておもふ松よりつたふこゑ山よりしもに鹿や鳴らん

山家雨　季緒

うく住をとはれぬとはのなかに人をまつともみえぬ軒のさびしさ

湖上月　　仙叡

さゝ浪やちりつもりたる花の上の月は氷とみかへのうら

田家霧　　喜因

くれぬとていそくも立ちかへる田面もみえぬ夕霧の空

遠擣衣　　道晃

とをき人の恋しき方にうつ衣たゝかはしもしらぬ衣

杜紅葉　　実維

霧ふかみいつしか深くそまるらん手もとにみれはあかきもみち

水岸菊　　資廉

咲しるも多き色ふかくうつろふ岸の白菊

冬

橋落葉　　隆胤

こゝのをふみつるみちもたえはてゝ木葉ふりしく岩の棧

寒夜霜　　喬福

かさねわひさむしろの上に霜やおく枕松風つもりし夜半の袖

園上霜　　永貞

明やらぬ夜をまつ梅かえのあさ霜にいとゝ白妙の花の夕くれ

寒夜霰　　御製

さひしさは神無月やまの庵に人かもたゝかまとゐ

江寒千鳥　　為條

入日うつる山のはるゝくさの原はやれてうつれ色こそまさりけれ

暁鐘　　　　　　　　　　　　　宗順

峰こえてはるかにきこえて山風の月を待ち〳〵ちとりなくなり

寒竈悠　　　　　　　　定識

春わかつ霞の雲にきえにけりくもゐにこゑはよそにこそ聞

恋

寄山恋　　　　　　　　紹巴

中〳〵にかへりて心つらきかなあはれ山にかゝる思ひを

〳〵暮〳〵　　　　　　　雅暠

かくてよにゆふへの暮にあはれ思ひ人のつらさ

〳〵原〳〵　　　　　　　経光

ふるさとは秋の夕の露にむすほゝれいつしか露も我袖の上

〳〵井〳〵　　　　　　　隆音

たつねては花さくころも山桜雨のさゝ山にあらしふく

〳〵鷹〳〵　　　　　　　玄紀

きえはてぬ雨夜の月の影見えて夜半の風そ身にしむ

〳〵浪〳〵　　　　　　　玄雅

みをつくし人のうきをおもふ人の行へ

〳〵枕〳〵　　　　　　　紹貞

うきをしるとも恋しき枕のなみたにしほる

くゑく　修應

新やいくひいそへ人をむかふ風ふきぬこひみ根れと

雑

臺有鶴　言行

とらさよみ篁鶴のてをく浜をらしまつ一二三十ちそちも鳴らん

古寺鐘　通茂

若とえら入相の鐘のこゑあらてかつぬ松乃ゆふ嵐

讀書之例　季賢

あさ月の竹をも風清し之讀書まへまちしものあれの風

洞溪水　雅季

すゝ風のうすみねあさいをつかちし松こへとうつ蘇林

旅行友　為清

しかゆくのいはぬあふなみとよひもつくさあふのよしかつふすし

枕邊燈　石衍

行そつれのしうひ行しのあつさしなこそつゝあかりすまゝ行ふ

海邊望　氏代

うらあさのかさくかつうふれあさつく代々行あのゆらへつけし

社頭松　經慶

立しのそとの夫つそらしけれとものくゝ神代のゆ海への松ゆきうしし

出題　為清朝臣

講師　利孝朝臣

奉行　三葉へ

寛永元年十月十日　禁裏御当座御会

首夏花　御製

ときハ木ハ若葉も千しほ織かへて野辺の緑そ床夏の花

権大納言藤原資勝

わかつまも緑大井河原みえなにかとお花の秋を舟まつらし

権大納言藤原実雄

初秋ゝ葉月やそふの十日ふかくも紅葉のいろそ見ゆらむさけの葉

正三位藤原雅経

こゝしのゝ山のけしき松秋の花中猶に細也とも人

正三位藤原公資

あさなさへこゝの内にあるらん藤の花か猶ゑ

権中納言藤原定親

ふくるよの庭の[illegible]秋中に二月の月の中にもむ

参議藤原宣房

あれさきのゝ中に林にかれゆくやさかりに住らん

神祇伯雅喬王

言上の御時名月手帳見えのかたに松に月のみえしも

左近衛中将藤原為[illegible]

棚機のまつの門にして秋牛野に細く花ならし

為光

またれつる身のうへゆくは七夕也

寿終らしめの人ゝとの[illegible]也

雑部

出題

寛文元年九月九日

禁中御当座和歌云

瀧邊菊

権大納言藤原実維

瀧の糸影ゆくかたに咲菊の花のみきはにかゝるしらなみ

正二位藤原雅章

きよき霧わけてつくしは瀧のしらいとにかゝるきくのしらなみ

正二位藤原弘資

咲菊の色を思ひかけや散らすらん岩間に落る瀧津瀬

奉和

権中納言藤原兼房

秋風は山路のをくにけらしな稲葉のすゑやよそさむく

左近衛権少将藤原為清

いく秋の霜をかさねて玉ゆらにかはらぬ影の露やかれて

出題

為清朝臣

寛文元年九月十三夜

禁裏御當座和哥会

十三夜月　沙豪

いつもとはまた秋の風もさやかにてくまなき夜はの月の影かな

見月　資廉

あふきみし玉のみかきにかけそへて千代もかはらぬ秋の夜の月

松間月　雅豊

さすかなを霞の松の間よりもれくる月の影ぞのとけき

草露月　　隆祐

吹風にたまらぬ袖はあたなれや月影みえて露そしら玉

菊籬月　　行家

移しうつろひゆく秋はしもにてかはる菊の籬のうへにすめる秋の月

都月　　通茂

あかすみしむかしの秋にやとりきてみやこの月のなかそらのかけ

浦上月　　為維

そのかみをおもひつゝて見わたせは浦のあはれにすめる月かけ

野月　　資交

まくらゆくまとにやとれる秋の月野への千種の花の露かな

河月　　実量

吹しほる月影さえてよはの浪にうつるかはせの月そなかるゝ

寄月祝　　常慶

くもりなき月にそえてしらし世の民とたのしむてる日もくもの上の月

出題　　為綱卿

奉行　　西三条前大納言

寛文二年正月十五日

於禁中御会始和歌

鶴遐年友

御製

くもゐのこのまつのちよまつ友なる鶴もいくちよかさねむ

関白光平

あひおひの松に契りて万代の庭にならへる千年の友鶴

權大納言[illegible]

千代をかさねてもかはらしと契りしすゑの友鶴のこゑ

権大納言藤原経継卿

年ふりし秋のなかはの白露に三たひの月のかけそやとれる

権大納言源通冬

いくとせの秋をかさねてみつ(か)らもひとりそみつる秋の夜の月

正三位藤原為継

よのなかにひさしき秋をへてもなを月のかけにそ千代をちきらむ

正三位藤原雅孝

よろつ代のかけもかはらすひさかたの月にちきれる秋のよはかな

正三位藤原弘資

百敷や庭のましはをわけ(て)くる月(の)ひかりやすみわたるらむ

権中納言藤原忠房

よのつねのあきとはいはしけふのよの月にちとせのかけそみえける

権中納言藤原季房

九重やなかき秋よのそらすみて雲井にみゆる月のかけかな

権中納言藤原嗣実

よろつよのちきりもひさしかけ(の)月をあきのよはにそ思ひやる哉

権中納言藤原経顕

よろつ代の秋もかさねてくもりなき月のちとせを君そみるへき

権中納言藤原公敦

九重の秋のよなかの月のかけいく千とせまてみむとすらん

正三位藤原基定

みゆりにをみ風さくさそてらし千世松かけのつるのはしも

正三位藤原嗣孝

きみか代をたえらしにき松かけしるしまよもとちともつるのこゑ

参議藤原氏信

千世ふるき流人わかめしや音あふしとふかく松かけにけるも

大宰権帥平時定

めくらす河の流をゑかくしの松かけちよ風の流のけふも

神祇伯雅壽王

九重のこゝろのちよわかすゑやおもひきりて人のこゝろも

左近衛中将藤原宗識

かきりなき君かよはひを松か枝にかけてとふ世の色も見る鶴

前大納言師房

君か代のかすにをよはんまつやなる庭の松かえのちとせ

前右大弁藤原光俊

かきりなき君か世をつくるしるしにも千世ふる松のこゝろを

左近衛中将藤原孝之

君かつもりこゝろの色もはるかなる雲井のみつの友鶴の声

左近衛中将藤原基房

松かくもりこゝろのちよのもとなる千年をのへの友鶴

治部大輔藤原範忠
冬きぬれや雪しらぬとみえしたちとせも君か代なれは名たかゝるらむ
左近権中将源有雅
かきりなきよはひを君にちきりけるかな千とせ契れる君か代のためし
左近権中将源通俊
ことしよりはしめて君かちよふへきおもひをつくるなるちとせかな
雲井なる人はかりそめにちとせまつ君か代のためしなれはや
右近権中将藤原実宣
くもゐまてたかきやかてゆくすゑの千とせをいはふ鶴の毛衣

左近権中将藤原隆房
よろつ代を君かかされる千世の松をかけて千とせの竹のけとて
蔵人大蔵少輔藤原定雅
よろつ代を君にそふへきたのみにてちきりけるかなおなしこゝろに
中務大輔源頼元
つきもせすよろつ代かけて君かへむ千とせの松のとしをかさねて
左近中将藤原隆親
よろつ代をかけてそちきる君かためおなしこゝろの竹のことの葉
惟宗（仁和寺）
千とせまてかはらぬ色の松かえに千世をかさねて君をいはゝむ

性恵　大覚寺

こゝろから和哥の浦にも世の中をなくとはすれと露そかゝる思
ふる年の月見しかすかに夜露にて世の中すゑにをく

尭恵　妙法院

尊光　青蓮院

多くねを世の中の秋の夜はおもひすてゝもやすらふ友のなきなと思

良覚　聖護院

かゝる身のよそのこゝろをしらぬ哉露
なにはしるへき数とならん

読師　鷹司大納言

講師　雅房朝臣

發聲　按察使前中納言

寛文二年二月廿四日　禁裏御当座

立春　沙弥

空しきに霞わたりてけさよりは春のひかりそ天にみちける

霞　資慶

かすみにしかすみもあへぬ世は花のにほひそまつにほひける

梅　光雅

さそへたる人もなき宿にうくひすの声あかぬ梅の花の色

春月　通茂

それとみし秋は秋にて春霞たえまにかすむ月の夜の色

見花　資熙

さくらはな見にこそきつれ春の日の永き日もなほ飽かぬ色

落花　弘資

散るとのみちらぬ色も中々に花にはつらき風やわかれん

夜　雅章

おほろなる春の夜ふかくきく声の月のかすめる

款冬　隆房

山吹の花のいろにもうつろひてかはつなくなる井手の里

三月尽　時房

秋ちる門中よりとをよみて八百しかすおもひとえてやけん

納涼　隆季

まつ風のかはすまた風もしらすけふの袂のほしさ

初秋　兼房

さりとはおもひしらすくとも海の夜ふかき秋の色

鴈　顕季

玉章の数よりかきて行くかりのつるかしそ秋のかね

鹿　宗家

山ちかくむしのよふこゑつまにとふつまこひ鹿の夜ふかく

山月　資隆

うらなみにいくよもこころ月の夜のまつ風月にすめ

浦月　道光

すくなきやさしほのはるのうらなみのやこる月影

擣衣　資隆

さよふけて衣うつなり人やすむまつの夜のよそのこゑ

時雨　基忠

降る山も入日の影にしくれつる時雨のこゑ

落葉　兼房

こすゑにはのこる紅葉もなかりけり山の風

雪　少納言

冬まてハ行くもかハらぬ宮すみに思ひにたえぬ松の一つ

恋意　為信

さらしと人をうらむ袖の露つらからぬなかつゝとやおもハれ

不逢恋　雅量

つれなさを人の心のうらみかハしよそにもしらぬ身をしらむ

旅恋　通秀

かりねせしさとのまくらのつゆけしな人の心もかハる世の中にて

述懐　雅康

さためなき世にもかくこそ人をゆるして絡かへりけれ

別恋　兼孝

さあましもことしのミハさしておもハてのちのあさかけにとやまたん

述懐　雅高

知りそめし代ゝの旅しやつらかりしとうしん思ひしらなん

懐旧　通維

いつしてハいとこをちむすつまにかつて様ゆかしきハ

暁　公遠

おきあかくつなき夢の床ハあかつきのこゝろまとひかな

旅　道堅

三千年の松のかけなきえたくはのかのよハく又ちらむとやまつ

祝　源茂治

うらしと見つゝめくらに紙敷しなり
春の花の世に夜をあかしあはれなりけく

通郷　中院

通郷　雅章

飛鳥戸　雅章判之

寛文二年二月廿一日

禁裏御會當座三十首和歌

初春霞　通茂

春くれは去年もひとしく霞にけり天のとまりも月なかりしに

春風　為清

春の来る月家やる玉のもすかもの　へうもれ梅の

春暁月　雅章

すみれゆくひかりてはかすみのとかにたゝうつるはるの月

春雨　資慶

わすれぬる名をや春にのこしてもちるをおしむと思ふなと

帰雁　通房

春霞のまよひにかへる雁かねは雲井の声そ聞えくる也

山花盛　雅房

三輪の山みねの桜はさきにけり花のさかりを三輪の杉むら

松霞　以敬

春日山いはねにたてる松か枝にかすみかゝれる峰の松かな

郭公　宗量

ほとゝきす人まちかほにしのひねもなく声きけはうれしかりけり

橘薫花二　通村

うつろはぬ色こそ見えね松の葉の秋のみとりも夏の色かな

納涼　時量

松かせに夏をわすれてしはしなほ木の下かけにすゝむ夕くれ

風告秋　資清

夕秋と松吹風の音きけは人まつ宵の軒の庵

萩露　資氏

朝露は秋のはしめて萩か枝の花の下露

虫声滋　隆光

しけくなりゆく虫の音の夕くれはしけみにむすふ虫の声

夕虫　為範

寄る方にみえつゝかゝりて山のはに下りてたれか

海上月　道晃

月ゆへにかゝりとをわたる海の沖つ浪よるもかくや見えし人

秋田　隆廣

夕霧のまよひて山田のしるしに風さへなびく秋の穂を

紅葉　通茂

ときはなる陰に染てこそかはらぬ色の木末なりけり

落葉　道晃

深山路は風やさそひてくれなゐのちりかふ紅葉あさきにしき

寒月　弘資

ときはなる松の緑に照月もさえてとをみる霜のよなよな

竹窓　為維

すみなれし竹のはやしにしつかにきこえてつもれる雪に

寄風恋　資慶

いつまでもしらぬ人の心から吹風の色をもみよかし

雲　雅章

道すがらあらし吹ぬる雲ぞくもりなき月を袖にやどさむ

暑々　通茂

つきもみし秋のはつ風すゞしきにまた夏衣ぬきかへむ

河々　尭然

夕月のきえぬ雲井にさしてもなほ月の都
こゝ家のに　経光

吾妻そと思ひしかとも三芳野の月をまちえて
ここに　業尾

ゆきくれて嵐の山の松か枝にかゝる月の影
くもる　雅家

初音まつ人のまちし鳴ける里人の声に
松尾寺　源憲忠

名のみ聞えし…の代にも見えし…

旅行　雅為

かつらき山へ…

かりそめに人をまつ尾の山に…かくれぬる人

嵯峨野

あはれとも…

出羽

荒尾井前大納言

美作

河野前大納言

寛文二年二月廿二日　水無瀬殿御法楽二十首和歌

朝霞　御製

さよふかき山のさくらの侍し立春や霞もたちてかすむなりけれ

新鶯　光平

鳴そむる山の雪の声もたえてまたぬるき花もかすむなりけれ

梅移水　資忠

こころなくも水のうつしゑ色も香も梅のかげにうつりてや見ん

春暁月　隆仁

雪のうちにはるもてなしのかげをいつまでかかるかすむ有明月

遠帰雁　兼信

春の夜のはるかの月のよはくまでも帰るいつくの方をさして

あけぼの　雅章

ゆくるまのさきのつくもはるかにもかへるともなき雁ぞなく

花風　実陳

ちりてこそあはれもまさるかぜのよそにうつる花の春風

雲雀　雅喬王

とのもりの庭のかすみの霞にまよひてまたたかくあがる

松霞　基熙

まつとはに松のしつえもとりてさけぬ葉るまし
寄雲霧　一業
久方の月やさとにもまかせぬ契りにはこよひも入らん道
寄月恋　弘資
かはるやこの下荻のそよくにもや猶ねかはしきる
寄荻恋　資行
くいてや神もうけひく君か門わかれしをとりねかはん
寄別恋　教業
かくしつゝ月もいとふ人もみれはあひ見まくほしさ
寄恋　基頼

まつにしもひとつの山の一夜の恋しいふくいさなそうきてうつる人
偕恋　顕長
いつもしらぬとつらぬ彼のまにかれいつらぬむ
蜂屋恋　為清
浦々の一もとのこほりくとてはなかれいれる
寄花恋　基頼
世はなつれなきはいつもかなしき人のめにもかなしき
待恋　資清
こゝにあらく一夜の月をはねよもひとつのうきなかし
見恋事　通茂

本より要なきはこよひやまさりけん山家の月のこゝろなき

拾遺　為條

みなかみにちりしもみちのなかるらん

かくてそみるへき川の家の錦

出観　為経朝臣

夫木　阿野実顕卿

寛永二年二月廿日

聖廟御法楽千首和歌

春

立春雲　光平

しつかなるあしたの空に春たちてなひく雲もさしのとけき

霞中鶯　嗣孝

咲かぬまもまつこそ聞けや鶯のはつねもしるき霞たつなり

橋辺霞　為庸

あけぬとて橋のゐてのかすみのはこそ立わかれ

故郷梅　　雅康

ふるさとは見しにもあらすなりにけりひとりにほへる軒の梅かな

岸柳　　道堅

あをみとり緑のいとのくりかへし岸にみえたる[illegible]の柳

橋上霞　　政資

あさ霞たなひく[illegible]のはしの[illegible]わたりてかすむ[illegible]

寄梅恋　　常悪

[illegible]なれはさそはれ[illegible]の[illegible]つらさはいさしらてこひしき

春月　　古歌

[illegible]のはなさけるのちはかすめともよしのの[illegible]

庭花　　政家

うつりゆく色をみえしとかくるきぬ[illegible]

翫花　　通頼

わすれめやことはのいろもちらすしてたえぬなさけのはなのかけ

苔色　　粉葉

あはれとも[illegible]の[illegible]のしもまたにほふかな

款冬　　隆量

[illegible]

友

卯花　　隆親

名にしれ月の光もとりそへて今宵かはりの月やさやけき

千首歌　　知忠

天の下とふのみつくしかへる月はかりもいつもさやかなる

敦之　　為兼

雲かかる月のかけのみさやかにて夜のあけかたになりにけるかな

寄月　　小督長

初音こそ空にしられすかはれける月の夜すからたのむへきかな

題西楼　　明房

秋やあらぬ月をしのふのつゆならてきえぬ秋の夜はのかなしさ

晩鐘夏　　道信

咲にほふ菊の花見るよそにかりそめもうつろひぬらむ

江戸　　定信

まつにしはやまとしもさそふ月かけはくもらぬ夜半に花そ散ける

旅

初秋　　為盛

まれにみるよはの月こそたのもしき秋の夜になれは松の風吹

薪露　　頼仁

風さえていかにすくらむ庭のおもにたまかしはらの松のむら

薪風　　相春

秋もいまいたくさひしきおもかけに吹くるかせのうへのをきの上風

題しらす　　済継

秋かせに人めや稲葉露かくてこほれおちぬる夕くれもよし

秋夕　　実隆

たゝ見れは秋はとのゝふかしひとしの夕のそらに雲もなく

旅泊月　　雅綱

軍なくしとらぬ人もいそくなり浦のなみ路の月にゆくさき

江月　　尭胤

たちわたる月をもかこふ浦風に波の月影のあけにける

峯月　　季経

まさに見しやよひの月の峯にさし月やゆくかたのとまりそ

暁鹿　　実条

あかつきのいつかはしかのねさめしてとふさしきりしかのね

待恋　　康親

待わひやこえぬるあともあさましや更ていつまてあかき夜の月

擣衣　　以緒

うちしるはいとゝよるさへきぬたうつ月にもなれしころもかな

夕霧　　公条

しくれする夕の雲やかゝれるとみえて霧たつ夕くれの空

冬

初時雨　　為継

わすら郭公わすれもやらぬ御所南殿の村雨乃あと

竹衣　　玄府

うらさらく秋の夕風音絶えてとまる和歌の宮の松

池の鳥　　親房

霜の夜しとの(?)月さえて雲の上まで池の水

修理亮　　常信

まゆの月ハその道に(?)風の関の清見が関をこえて

滝壺　　雅光

さく秋の声(?)も月の影をのこすことのゆかしき道乃

閉戸　　[illegible]

ゆふ山の霧のあなたの風にて一むらの雲霞のあと

情蔵庵　　定蔵

秋にきて(?)とつかの月の影も雲の夕べの空の色

宗

とこやし宗　　光雅

いつまでか住みし老(?)の身もあはれの中に年ふりて

くく家々　　元信

わすれゆくとしのうちにも十二月のおもかげの

く掟く　　宗香(?)

こゝろあるけふの月を三日月の夕暮の空にこそあれ

ゝ名のゝ　家隆

せきもりのおもひもしらぬはしくらぬ人のあはれもさそふ秋の月

ゝ秋ゝ　明尊

いかならむつゆにをかすむ霧のまにまに秋の野のをしかやすらん

ゝ花ゝ　永胤

さくら花一枝かざしのおもひいでにたかきなかにそこもるなる

雑

山家　兼房

あれしらぬ月はさびしきひとつ家のよるはものすこき松の秋風

田家　寂蓮

やとりして田舎のさとをかへり見れは露のよすがにかゝるしら雲

山中灯　資冬

うきよをはのかれてすめるみやまにもおきゐてよるはかゝる松の灯

羇旅　資行

ふる里のおもかけうかぶたびまくら夢のうちにもかへるなりけり

懐旧　源当時

すみなれしもとのすみかを思ひいでて昔をしのぶ袖のあはれさ

寄松祝　為継

松竹のみとりはたえぬ千代かけてわか君の代のしるしとそ見る

出題　為藤卿女

未詳　小野前大納言

嘉元二年三月十六日

春宮御所当座和歌

初花　基忠

春毎にわかぬ色香はあつめきて去年の人にまつ咲梅か

鶯　定成

まちつくし春めかりける鶯の心しり花さくらん

郭公　隆氏

夜よ程のくつろきとおもひけれは又も花なる

夕花　為雅

あさ夕になかめし風に梅かえのちりしく花の色の梅か香

古花　雅尚

月影は夕暮ことに梅か枝のかをりはうちにたちそひにけり

嵐花　為信

咲ましる色もかはらてまさりけり又さらにみのちる花やさかりなる

若花　雅房

みとりなる花のかさしに山里かけて千代をかさねよ秋のかせまて

老花　資兼

梅のかに老の命もなかへてはなにをかはなく花の下風

野花　弘資

分けゆけは道もしられす花の露にのみそてはぬれつゝ宿をかりなむ

社花　雅房

宮人のしめゆふ杜の木の間よりいくとせ神をかけてまつれる花の下紐

雲花　実業

わけのほるやまの嶺のしら雲の色もかはらぬ花のさかりに

雪花　雅光

さそひきてにほふ花かさねくものまにちる雪の春の色かとそみる

浦花　通茂

風ふかは花のかをりもしほかせにたつ浦なみの花のしら雲

河花　　　　　　　　　　　　　　[illegible]

さゝりうつれハ花の宿霞ハ成ま と の ゆふま ま れ ふ宇らなら ん [illegible]

花下忘帰　　　　　　　　　　　　資茂

夕ハまた 春 の日くらし ゆく人の 花の下もと [illegible]

花雪　　　　　　　　　　　　　　光賢

さそひ行風をいとひし雪とのみちるをとめぬ花そさく なる

花夜　　　　　　　　　　　　　　通茂

ねぬくハ夢もさそはぬ花みてこそ つゆ や月ぬる

花旬　　　　　　　　　　　　　　資廉

咲そめしやいとけなく立名のみわかれてもまつ花さかりハ

花友　　　　　　　　　　　　　　雅章

高砂の尾上の花のさかりしも思ふ花の下かけハ

惜花　　　　　　　　　　　　　　雅房

来れかし散こそ有とも つらきものからいつとしれ風のまゝの花ならん

講師　　　　　　　経季

奉行　　　　　　　為條

出題　　　　　　　為清卿

寛文二年三月廿五日

任厳旨着到三十一首和歌

神代よりかはらぬ色のそれとしも常盤に打なひく心の月影
此寺と人の宮柱たつらむ

つの國霧

初秋

かくてやわけ入る色も見へすかくれなき風も

竹鶯

雨後

春の夜はあけぬる空の色のみえぬるも心なし

梅風　　　　親仁

よそにこそ梅の匂ひを春風のたよりにとめよかきねのみち

春曉月　　　隆光

よそに見ん霞にしづむあけぼのゝ春のよふかき月のかたぶき

落花　　　　雅純

見るうちに一夜のほど[illegible]に吹風にちる花の[illegible]ぞあはれ

籬花　　　　玉尤

見る[illegible]籬の花のさかりはかぎりしらぬまがきの色もえん

松藤　　　　英延

[illegible]はちとせをともにかけて松の藤の色もかはらぬ松の藤なみ

[illegible]子規　　　門覚

[illegible]の音成夜ふけて西の空にほのかに鳴てあけがたの月

新樹　　　　廣孝

春風にちりし花の木の梢もかさねてしげる夏の木の色

夕納涼　　　英暎

さゝ浪のよるもしらぬひあかね空夕風の[illegible]松[illegible]

織女琴　　　元經

秋の夜の風の音やつまごとにかたよせ琴のしらべを

野萩　　　　要枝

下葉より色づきそめて白露のあさぢがはらの萩原

秋夕　宗尊

よこ雲もしづかにつゝくなれは又一つゝれねたるかな

山月　実晴

なかなかに山の端ちかき月をいつか光すてゝ行らん

池月　資行

月そすむ山もとの影そかよふ池の水のおもてに

旅泊夜月　兼氏

旅やこの月見ぬ夜かはしらしかし月影もたえぬ舟のうきね

羇旅　季顕

野へのさとの旅寝せしも海にみなとの一…風もふかし

明石也し　資信

雲ちかくなれにしかな明石にて我のみそかなしきよそ

宮月　季信

霧はれて雲ひとつなきゆふ月の影…ことなれ秋の月影

海辺雲　守條

西の海やなかれにしまの…のゆく…の旅の舟かな

寄風恋　資忠

いつしかと…の…のことはりもしらぬ…つれなき風

海　西蔵

猶かはるみそかの…ありその海のかせそふく

〃〃 為氏
雪ふかきひとりねさむき夜半の月見ぬこそあらめやとはまし
〃〃 基〃 康光
宮城野の秋風そよく夜半の月影やさそふらん すゝしく
〃〃 家〃 光経
玉島の水の影やさこそ思ひやるらむ浪よ めつらしき
柳雲 行念
忘れぬや桜をとこそ見つく我のみそ柳の枝のさとには
宗行 守長
花のなかに暮れて萬代と待つ雪のまきの生行

思出旅 源兼氏
一 つまもなく風も露も涙しいかて松の下風
侍従為家 雅有
さとのかたの夜をのこすやらぬ今やころの老人逢路
述懐 資冬
数ならぬ身の人をいふへし月かけを雲のあやにそらゆ
行之 貞教
命をはわかみにしてまかせつゝ
是をもに後の心とおもかん

誹諧師

誹諧師

京戸

出羽

寛文二年六月廿九日

西翁法眼来六十三にて初卒

五十二にて

松寿　御家

花に又いつそやおもふしらぬ姫の我宿や家風を見るの花の有り

高成友　光算

わかるゝ友よ言過し鶯の声も戸ぬけ何の何ぬ吾行

梅風　粉葉

移る日の影をさかりと見すくし花の風を吹わけ風も吹け梅く

柳垂絲　　竹葉

久かたのあまねき春の風になひくともなき青柳の糸

春雪　　元仁

春雨にもえゆく草のはつかにもおもひそめけるのへのわかくさ

子日　　道誠

あらしくく春の雑のゝたかめつかりてと世をへ世ぬ世のさかひ

海帰雁　　為定

こえゆかんかへる雁かねやさかしまに霞の風のよそのあけほの

春月　　康光

花さくいつをいつまて春の月も霞のうへのかすみをかけて八

待花　　為藤

待ほとは花かとそ見る白雲のたなひく山のみねのさくらに

花如旧　　雅高

さくらさく木のもとかけにかつきえてふりにし春やなを花の色

遅日　　為成

宮人の待わひし春の日かけやなかき日のくれかたき

鶯有声　　実雄

とふ山のまかせになきてうくひすのこゑはかりこそおもひしらるれ

夏七首

新樹　　雅有

とふらふ音わすれぬ風の名残して夜ハみられぬくもゐなりしき

湖辺月　資経

あふミのやさゝ浪よするにほの海の影ハ西行月のさやけさ

不審　基熙

天の戸を出ぬる月のにほふ空のあたりまでさそふはるかし

夕梅　資廉

咲梅の夕の風ハさそへとも色もかハらぬ軒の香そする

河水鶴　嗣孝

行さきの影やうつらむ川水の流にあそぶあしたつの声

沢螢　一　季顕

露ふかき夕ぐれ上しかも有明の月まちぬれハふくるよハかな

松下泉　福光

たちよれば岩井の水のすゝしさに夏を忘るゝ松の下陰

秋十二首

初秋風　公親

吹そめし秋のはつかせとハしらぬ久方の空の色もかはれる

野萩　宣秀

露なからそよく野原の萩かえに夕日のこる庭の萩原

朝露萩　宗量

わけ行ハ露もこほれぬ松萩の露の下にも花ハみたれて

霧中雁　　雅房
人とはぬ草の庵の霧こめてまかせ風まつもしかりなく

鹿聲　　為藤
ひとりねのさ夜の枕にかよひきて鹿のねながき秋のよの月

原月　　為定
むさし野やはてなき原の月かけはなを行末そかきりなりける

関屋月　　為定
ふるさとの関やの軒にもりきて板まもあかぬ月そさやけき

惜月　　為藤
ながめつゝ明行空のつきかけのをしむかひなく入ぬへきなり

河霧　　雅有
吹はらふ風もさためなき河霧のたえまにみゆる宇治のかはをさ

紅葉深　　資名　定為
立田川しくれてそむる紅葉はのふかきいろにそ秋はみえける

擣衣稀　　定為　資藤
聞人もまれなるさとの夜さむにころもうつなる音のさひしさ

九月盡　　為定
秋はいまゆふへの空にかへるなり入日のかけをしたひても見む

冬十首
寒夜時雨　　雅房

一よはこゝろかなれ深山なる雪のなかにそ何をかはせん

田霜　雅孝

霜よりも稲葉の袖のむすほゝれしをれてはぬるゝ霜

湖氷　正業

風のをとはかたく吹とも湖にこほれる氷かな

浦千鳥　兼春

浮やまもとに磯の浦なる千鳥なくなり

橋雪　通経

あられふるや深山の谷のふみかはのお古き

寄車望　一　為純

吹さそふあらしとともに年の暮ゆくらん

歳暮過　資忠

手を折りて数ふれは年の暮ゆかは

忘恋そ

寄風恋　為継

吹そふるしるへの風のたよりにも

寄雲恋　善之

恋しさの雲のはてなき

寄草恋　為清

いつまてかあはてのみふる年の草のかれはてん

くゝ本こ　随世

らしきしハらち縁そへ人こそれ夜之ひハうしやか落葉住

さこく衣く　素民

松かるつめ哉軒の庵のきたなかす作る之人券やくるすき

くく絵く　酒当治

三秋やいく之す六行まら上付代絵ゝたもとあく志ミてみえハ

雑六こし

岸竹

月竹ろにしさしほくく行つよ日も三てねきし縁の海の底しさ

石野鶴　一　光雅

いくちとせ之て語りつ六百数の柳ゝ行そく人さすつきて志

松木　治資

殿作いそく何とそれ松くやあふとしきれ素本たし

破浪　通茂

こね松も主るしれいとこゆくふれ破と段きとれたるきしふ

羅の中野　菊屋

永くりよ之人ハ当代も我他の花行き海よれ素家のしくく

寺社院　之代

雨らかるしくかりらハいつし我老

如雪しめくくらんの　わつ世代

出題　為清卿女

読師　光雅

講師　阿野大納言

寛文二年七月七日　禁中和歌御会

名所七夕　御製

契りとそ一夜をよそハわたるらん雨くもかくハ河[illegible]世をまちて

冨小路光年

あすしら門出の契りハ今宵かさね契りもうしや[illegible]

左近大将基熙

契りとてしらぬ一夜の河[illegible]を[illegible]

権中納言藤原資季

星合のそらにかさりやこひわたるほしあひの雲のやとりかな

権大納言源通成

とし毎にゆきあひしことたえすしてよわたる星やあかぬ契そ

正二位藤原雅経

たなはたとくらへてつらきあふことは一とせにやかはりなむ

参議藤原雅有

ふくこゑのさそふつゝかはへすゝしきをひとりきゝつゝねぬ夜半の秋風

参議左大弁藤原資平

こよひこそ袖もほさかつゝおほふ雲に八日のみ星をまつ

一　新後拾遺集

こよひわか星にちきりしゆふくれを待つけかさねてなかきよのよと

従二位藤原為信

たなはたの天のかはらのくもゐにて八日の朝の行かへりなむ

左近衛権中将実藤

あふことのかたきちきりはかはすともこよひかなしき天の川風

左近衛権中将藤原隆教

行とまるひとちかひもなしつゆけき星のとこの秋風

左近衛権中将藤原家定

星合のえたにはしわたしてうき川風に天の川まよふかひもなく

藤原守静朝臣

東にはふじのねのかゝりし雪のくもはれていつしかみえん

左近衛権少将藤原朝臣

ちかはりつもりし雪のころもの名のりぬるをきぬ

藤原三位上冷泉為清

見わたせはふじのねのしらゆきもまさに秋のよにしもいかにしも

出羽

藤井大和守

常陸

一

藤原守和

寛文二年六月八日仙洞にて富士をよませられし

名所のうちに詩哥

題富士

突兀士峯無与倚　雲間留雪幾千秋　清容不止窮天際　騎蹄校乗六十州

堯恕　妙法院宮

いさゝかもくもらぬ月にみかゝれて又ふしのねに雪そつもれる

清閑寺熙房

富士山

臣僧承章上

隠見鬱愁雲霧間　雪巓突兀聳天関　士峯莫恐竜顔春

支竺扶桑只一山

ふもとよりみねのまさくつもりてなかくへ山としらぬゆきかな　式部卿穏仁　八条宮

冨士山

半天突出碧嵯峨　一万古蓬莱鎮天倭　臣僧慈永謹題

浮雲浅處鶴婆娑　誠向山顛看白雲

冨士のねは[illegible]　正二位藤原雅章　飛鳥井

冨士山

畫出士峯吹不寒　四時後素雪漫々　臣僧等修謹題　天竜寺修長老

別知洞裏神仙境

東海蓬莱止玉欄

天下に[illegible]冨士のねの雪[illegible]　正二位藤原実豊　正親町

題冨士　臣僧永柏

士嶺曽安豆駿間　畫工描得對天顔　合炯孳雪一團玉

不識何人名日山

冨士のねは[illegible]　権大納言藤原基福　園

士峯飛入御屏間　好是景濂論白鵬　何用別尋蓬島去　臣僧通憲謹題

吾邦亦自有斯山

こゝにまたありとみえけり山とみの風に動かぬ松の深きて

権大納言源通茂　中院

同日　於御屏風に三穂乃松原畫を見て

名残のこゝろをかつうつす詩哥

三穂圖

三穂松林欝老蒼　御屏巧鳫向竜床　好添千歳傲雪色

葉々枝々壽我皇

臣僧崇五謹題　金地院

行末もみほの松原千世やへむ松の緑に幾代かはらて

三山検校道晃　照高院

三穂松原

都入海中多少峯　蒼官對顆夕陽濃　古来三尺保高節

臣僧梵岑謹題　相国寺味定院

碧落衝開原上案

みわたせはこゝろもみほの松原のくもとなみとにうかふ松かな　正三位藤原公業　日野

畫手餘工佳景鮮　雲収波静片帆懸

臣僧題吉譔題　相国寺

三穂青松御座前　聖恩及處無夷洛

みわたせはたゝみの松のこのまよりなかむる三保のうらの夕なみ　正三位藤原弘資　日野

三穂松原

臣僧祖栢譔題

地發土峰南大洋　万株松樹欝蒼々　天人一曲猶古今

千里風声奏霓裳

さらてたにこゝろもうつるうきしまのまつにかよふうらの浦風　正三位藤原資慶　烏丸

三穂松

臣僧伊川周育拜上

嘉遊天女羽衣軽　景月仙宮照綉甍　海底白鷺玉峰影

青松鴉黒暮鐘声

ゆふ暮のかすみもはるゝうらなみにゆふひもしつむ三保の松原　神祇伯雅喬王　白河之庄

寛文二年九月八日

禁裏御所御会

白菊戴霜

光平

万歳のためしにせまく君か庭うつろひもせぬ菊の白露

兼晴

咲にほふ千世の籬の白菊はおく白露も枯ぬなりけん

資廉

とく存候先日者預御札殊ニ参上仕候ニ付而御礼申入候

頼光

以使者申述候猶期後音之時候恐惶謹言

雅楽頭

先者右之段可得御意如此ニ御座候恐惶謹言

定誠

よて御礼申述候猶期後音之時候恐惶謹言

重信

右為御礼如此御座候猶期後音之時候恐惶謹言

一　當治

猶期後音之時候恐惶謹言

[illegible]月[illegible]日　松平上野守

酒井大炊頭

為[illegible]和[illegible]

出[illegible]

奉行

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan